

この機に同志社開校の機がもたらされた。しかも新島はボードからの正式の宣教師であり、その背後には同社の社長たるアルフューズ、ハーデイがあつて大いに力癪を入れてゐる。しかのみならず、新島その人たるや、在米中から岩倉一行と相識の間柄にあり、特に木戸孝允、田中不二麿の二人には厚い信頼をおかれてゐる。

こうして、グリーン夫妻・デヴィスと新島は合流し、次いでジェーンズのもとにあつた熊本バンド三十五名がはる／＼と京都に上つて同志社に入る。

明治九年九月には、同志社の確固たる地盤はしつかりと根を下したのであります。

## 七

新島の、かくも華々しい効果を収めた背後には、勿論、當時邪宗禁令の廢止されたる天の時その宜しきを得たにもよるであらうし、又その同志を糾合するや、阪神開港場の地を中心としたところの、地の利其の宜しきにもよるであらう。が、更に彼の背後には、アメリカン・ボードの力と、日本政府の高官の知遇といふ二つの人的要素が加はつてゐたこ

とを忘れてはいけない。

この二つの要素、それは人的であり、又、個人的な色彩を有つたものなることも事實ではあるが、一方はかの國の資本力であり、一方はこの國の體制を築き上げた政治的代表者であります。この二つの要素によつて、彼の道は、正に坦々たる公道となつたことは掩ふべくもない事實ではあるが、私共は、このことの反面をも見のがしてはいけないだらう。といふのは、この好條件が一定の歴史的進展の途上に於いて、つひには逆に同志社、ひいては日本の基督教にとつて、進退兩難の羈絆となつたことを。

かゝることの萌芽は、既に同志社設立の當時からほの見えることであつて、最初、新島は校舎の地を卜するに大阪を以てした。ところが當時、大阪の府知事は、劍豪渡邊昇で、しかも、大の文明開化嫌ひときてゐるから、どうしても新島の願ひをきゝ入れなかつた。丁度その時、京都の知事だつたのは、木戸孝允の腹心で、しかも文明開化論者たる榎村正直でありました。

そこで新島は、木戸の力に頼つて京都に落付くことにしたのですが、その時の第一條件



は、學校に於いて聖書の講義をしないといふことであります。勿論このことは新島にとつては大したことではなかつたに違ひない。彼の同志社設立の意圖は「予の確信によれば、吾等が傳道師養成所以外に一の普通大學程度に非ずんば吾等の事業の繁榮は望み難い」といふのであつたに徴してもわかる。

併し、頭から信仰に固まつてゐる人々には、この條件が喜ばれる筈はありません。第一にデヴィス老人が反對した。

「聖書を教へない基督教々育なんて世の中にあるものか」

といふわけ、次には、傳道會社の在日宣教師團がいきり立つて、これは本國へ通告書を出してゐます。

かうして、同志社とアメリカン・ボードとの間の調和は開校早々からもう亂れ勝ちであつた——といふのも、その原因は要するに、同志社の設立を可能ならしめた好條件が逆に、基督教々育の障害となつた、といふことに他ならないわけです。

同志社は、太平洋を挟んだこの二つの國の力を利用して立つたのでありますが、時を經

るに随つて、その國情の差異が、漸やく相容れぬ程のものたることを著はし始めるや、その二つの上に立つた同志社そのものも亦、自らの足場を、彼れか我れかの孰れかにきめなければならぬ。これが同志社、否、日本に於ける基督教の負はされた運命なのだ。

賢明な新島には、この來るべき危機が判つてゐた筈です。しかも彼は、暗黙のうちに、より賢明な方向に舵をとつてゐたのでした。

明治十七年頃から彼は京都市内の紳士豪商に相談を持ちかけたり、井上馨の援助を求めたりして、頻りに同志社の獨立を計つてゐました。そのうちに恩人たるハーデイは逝去する。關東の基督教勢力の中心をなす「日本基督一致教會」と、同志社中心の關西勢力「日本組合教會」の合同が問題となる。新島は轟々の批難を浴びつゝも、とう／＼この合同を有耶無耶にしてしまふ等々。

かうして明治二十三年一月、新島は壯齡四十八歳を以て、その輝かしく、あわたゞしい生涯を閉ぢたのであります。



けれ共、新島の生前には、よし彼が教會の合同を拒否したにせよ、未だ、それに對しては「ビュリータンの自由精神」の故である、との好意的解釋がなされてゐた。

併し、彼の死後數年を出でずして、ポールドから提出された二つの問題、

「學校の基本金はポールドのものか、同志社のものか」

「組合の信仰簡條を、同志社は承認するか否か」

といふ手詰の談判を持ち出されるに至つては、もはや新島たりとも、その「ビュリータンの自由精神」でもつて解決することが出来なかつたであらう。

同志社は第一の問題に對しては、寄附金よりなる基本金は、新島の演説によるものであるから當然同志社の自由にすべきものだとし、第二の問に對しては「否」を答へた。そして

「同志社々員は、單に『基督教主義の學校を維持す』といふ以外には何事も告白する能

はず」

と答へ、かうして同志社とポールドとの關係は、明治二十九年に至つては全く絶えてしまつたのであります。

創立當初よりこゝに二十年、同志社の歴史は、如何にして急速に日本の國家體制と歩を一にするかにかゝつてゐたかの觀があります。しかも、二十三年を中心とする日本國家の機構整備、朝鮮問題をめぐる對支政策は、いやが上にも思想・教育上の日本的なる統一を必要ならしめ、隨つて、この基督教を標榜する學園に對しては次から次へと難關が設けられた。

明治二十五年より初まつた、かの有名な、「宗教と教育との衝突」論に於ては、井上博士に對して、一般基督教學徒は、同志社員を中堅として堂々論難論駁した。そして恐らくはこれが日本に於ける基督教理論家の最後の花を飾つたものでもあつたのでせう。特に、この論戰の勇士、大西祝、元良勇次郎兩博士の所論は、後人に無量の感を抱かせるものであります。



かくして、明治三十一年には、社長横井時雄先生は斷然、同志社の校則より「基督教主義」の全文を削除し、越えて三十二年、訓令第十二條によつて宗教々育が禁ぜらるゝや、同志社も普通學校の列位に加はりました。

たとひ百人の新島襄ありとも、滔々たるこの大勢を如何にして翻し得たでせう。否、新島先生にして始めて同志社が、その後の苦難の途をきり拓くだけの底力を造り得たであらうことを考へれば、私共はこの教育界の偉人に對して理解を以てする敬慕を深くするのであり、その荊の途をすら私共は、先生の幸福人たりし所以と思ふのであります。

## 九

さて、以上敍べた新島襄先生を中心とする日本に於ける基督教々育の問題は何を暗示するかを考へてみませう。

一言にして云へば、以上の経過こそは、我國に於ける所謂、自由主義教育一般の歴史にも、當然あてはまるものなのです。

歐洲大戰以後、我が國には、一時自由主義教育の風靡した時代がありました。しかも、今やその理論、その實踐が何處にありませうか。ダルトン案、プロジェクト案、全人教育皆宜敷い。併し、その發展を約束するものは、決してこれらの教育原理そのものではなくて、全然他のものである。

例を以て示せば、現在日本の中等學校中、基督教關係のものは約九十校、生徒數四萬ですが、そのうち七十校、八〇%は女子の中等學校である。何故の偏在か？

基督教的な教育、所謂一般に云ふ自由教育の部面は家庭中心主義に立たざるを得ない。何故か。

こゝに、我國家族制への批判點が生じ、又、我國公民教育の缺陷が新たに問題となり得るのであり、而して、眞に自由主義教育を叫ぶ者の當然の反省が歸趨する處を私共は見るのであります。



## 年表

最初、年表風に枠に入れて書く豫定でしたが、種々の都合で之を見出し風に書き直し、十年間毎に項別の年表を掲出することにしました。

従つて、年代的な特徴等、多年に亘るものは、適當の所に一言付け加へるに止める。讀者は、この十年一節の年度表によつて、日本及び西洋に於ける、横の聯關を、常識的な智識の中に組入れらるれば、幸甚とする。

### 一三〇〇—〇九（西紀。以下略）

西洋史では、文藝復興の前夜に當り、法王權の衰微が先づ表はれ、フランス國會が開かれる。有名なベトラルカはこの間に誕生。

日本では、後伏見・後二條・花園・三天皇に亘り、元寇以後の財政難にあえぐ北條氏が、京師の勢力を削ぎ奉る兩統更立・五攝家の設立によつて、一時小康を得てゐる。武士道

教育・五山教化事業・庶民寺小屋教育の萌芽。

### 一三〇〇—一九

西洋にては、イタリヤ人フラヴィオ、ジョーヤによる航海用羅針盤の發明あり、遠洋航海の刺戟となり、又同國にポツカチオ誕生。

日本にては、此の期の末、後醍醐天皇御即位。北條政權傾く。北條顯時金澤文庫を建つ。

### 一三〇〇—二九

西洋にては、フランス・カペー王朝絶え新にヴァロア王朝起る。イタリヤ人ダンテ「神曲」を遺して歿。

日本にては、引き続き後醍醐天皇の御代、正中の變あり、藤原俊基・資朝等捕はる。

### 一三〇〇—三九

西洋にては、ギリシヤ文化復興益々著しく、北方にては英佛百年戦争開かる。日本にては、北條氏滅亡、建武中興、つゞいて尊氏謀叛と目まぐるしい變轉の中に、後醍醐天皇崩御、村上天皇御即位あり、北畠親房は「神皇正統記」を上る。



一三四〇—四九

ヨーロッパに黒死病の大流行あり、此の間英佛の戦亂はなほつゞき、ドイツにては、プ  
ラーク大學の創設を見る。

日本にては、南北抗争なほつゞく。

一三五〇—五九

ドイツにては、黄金文書の發布あり、七選帝侯の決定を見、後來のドイツ帝國統一への  
伏線となる。ポルトラノのアフリカ地圖現はる。

尊氏死し、子義詮つゞき、筑後川の戦等あり、國內なほ騒然。此の頃より、朝鮮及び支那  
の沿岸、漸く倭寇の侵略に悩む。

一三六〇—六九

中亞の風雲兒チムール、第二次蒙古大帝國建設に着手。ウイーン大學創設。

日本にては、南朝後龜山天皇の御代となり、足利氏の工作着々進む。

一三七〇—七九

ローマ教會大分裂、愈々多事。ペトラルカ、ボツカチオつゞいて歿。

明國及び高麗國の倭寇禁壓の申入れ頻々なり。

一三八〇—八九

ドイツにハイデルベルヒ大學創設、イギリスでウイクリフ聖書の英譯出る。

日本では、西國の惑星大内氏對民貿易にて巨利を占め、機業を起す。

一三九〇—九九

チムール帝國の膨脹。

日本、南北朝合一の實現、義滿の金閣寺建立。上杉氏の足利學校復興。

一四〇〇—九

英國議會、ウイクリフの信徒の焚刑を決定。ライプチヒ大學の創設。

足利幕府、勘合符制度による對明貿易。

一四一〇—一九

ローマ教會の内部的崩壊つゞき、法王權維持の爲めのコンスタンス宗教會議開かる。プ



ラーグ大學教授ヨハン・フスの焚刑、つゞいてフス黨の叛亂。

一四二〇—二九

フス黨の叛亂なほ各地に猖獗を極む。英佛百年の終末を飾るオルレアンの少女ジャンヌダルクの出現。

足利幕府治下、洪水、飢饉等變災つゞく。

一四三〇—三九

バーゼル、フロレンス等に宗教會議頻々。グーテンベルヒ活字印刷を創む。

一四四〇—四九

ポルトガル人、ウエルデ岬迂回航路發見、同國人による黒人貿易始る。

この頃義政の東山時代。

一四五〇—五九

東ローマ帝國滅亡。英佛百年戰爭終る。英國内貴族の權力爭奪戰バラ戰爭始る。

足利義政による徳政令頻々。晝聖雪舟渡明。

一四六〇—六九

エラスムス生る（一四六七—一五三六）年英國ヨーク王朝起る。

應仁の亂始り、これより世は戰國となる。

一四七〇—七九

晝聖ミケランジェロ生る（一四七五—一五六四）應仁の騷亂なほつゞき、京都は荒廢し、幕府の威權地に墮ちたが、地方の群雄漸やくその鋒をあらわし、下剋上の名に於けるが如く、新鮮なる勢力にすくむ。

一四八〇—八九

北歐のロシア、漸く蒙古人の覇絆を脱し、着々國家的建設を急ぐ。英國にチュードル王朝起る。バーソロミュー・ジャズ喜望岬發見。ルーテル生る（一四八三—一五四六）ツ、ウイングリー生る（一四八五—一五三一）ラファエル生る（一四八三—一五二〇）大内氏の遺明船つゞく。一向一揆。

一四九〇—九九



コロンブスのアメリカ発見、つゞいてバスコ・ダ・ガマの印度航路発見あり、ポルトガル及びスペインの植民地競走の幕は切り下ろされ、東西は益々接近する。アルプスの山男スウイスは、ハプスブルグ家の壓制に抗して獨立する。

日本では、戦國の擾亂尙ほ絶えず、足利將軍は虚位を擁し、皇室の御衰微甚し。

#### 一五〇〇—九

ポルトガル人ゴア占領、印度經營に着手。サクソニヤ侯フレデリック、ウイッテンベルヒ大學を創設す。カルヴァン生る（一五〇九—一五六四）

日本にては、各地に、宗教一揆、土一揆等、益々騷擾を加ふ。陶工祥瑞五郎、明より陶法を傳ふ。

#### 一五二〇—一九

マルチン・ルーテル、ローマ法王の免罪符販賣に反対し、ウイッテンベルヒ大學門前に九十五ヶ條の質問書を掲示し、舌端火の如く、法王權を攻撃し、宗教改革の發端を開く。歴史上、この期を以て中古の初めとする。

時恰かも、東洋の果、日本においても亦、親鸞、一偏、法然日蓮等の民衆的宗教が續出して、平民のエネルギを高めてゐる。

#### 一五三〇—二九

ローマ教會は、ルーテル派鎮壓に大童となり、ウォルムスす審問開かる。宗教改革は著しく政治的色彩を帯び、ドイツ騎士團の叛亂となり、つゞいて、かのドイツ農民戰爭の展開となる。

この頃、日本においても、法華宗徒の迫害が行はれてゐる。

#### 一五三〇—三九

ドイツにては、新教側の諸侯の政治的結合としてのシュマルカルデン同盟が成立しフランスにてはカルヴァン派の追放、イギリス教會はローマ教會よりの分離を策し、歐洲の渦巻きは益々深まる。

ルーテルはワルトブルグ城中深く身を隠して、聖書のドイツ譯を完成。一方、この近世的波動を更に高めたコペルニクスの地動説が現はれる。



#### 一五四〇—四九

北ドイツは、宗教戦争シユマルカルデン戦争の場垣。この間、舊教側の革新派、ジェス・イツト會生る。ベサリウスの解剖學。愈々東洋は、ポルトガル、スペインの貿易と植民の競争舞臺と化し、ポルトガル人の種子島漂着を端緒として、所謂南蠻人は、島國日本にも亦踵を接して押し寄せる時期となつた。又この期に、宣教師ザヴィエルの來朝あり、西洋文化輸入の發端となる。

#### 一五五〇—五九

さしもの宗教的混亂も、アウグスブルグの宗教和議を期として、ルーテル派信教の自由が一應成立した。

ポルトガルよりの砲術傳來によつて、日本の戰國武將達は、その戦法一變を餘儀なくされた。

#### 一五六〇—六九

フランスにてはカルヴイン派新教の抑壓なほつゞき、つひにユグノーの反亂を見る。イ

スパニヤの虐政に抗してネーデルランドの叛、後數年として獨立を完成。

日本では、織田信長の統一事業着々成功、家康は一向一揆を鎮壓。

#### 一五七〇—七九

フランスにおいても、新舊兩教派の和議成立す（サンジェルマンの和約）、しかも、つづいて所謂セントバーソロミュー祭日の大虐殺あり、宗教の衣をつけた民衆の高揚は徹底的に抑壓された。

日本でも、信長の一向一揆鎮定は成功。そしてこの頃、九州一帯に天主教の廣布を見る。之は、つゞいて行はれた封建制の再組織の過程において、一個の痛として残る。

#### 一五八〇—八九

オランダ獨立宣言、共和國として誕生。同國は、時將に、スペイン、ポルトガルの衰運に際し、その地位を奪つて、東洋經營を中心とする世界的海運國として成長して行く。イギリスはイスパニヤの無敵艦隊を破つて、制海權を掌握、エリザベス朝の隆盛期を現出して行く。



この時、ロシヤ・ロマノフ王朝のシベリヤ經營始る。日本への天主教の傳導は益々高揚し、九州の諸侯（有馬、大友等）はローマ法王に使者を派遣するに至る。一方信長の後を承けて天下を一統した秀吉は、この西洋流の新しいイデオロギーの觸手を二葉の中に摘み取らうと、既に設立された教會の破壊を進める。とはいへ秀吉は、一方、當時昂まりつつあつた商業への途を進めるために大判小判金を鑄た。

#### 一五九〇—九九

フランスでは、ナントの勅令において、新教の自由が漸く公認された。イギリス及びオランダは漸く、ポルトガル、スペインの後を承けて、東洋貿易の觸手を伸ばす。イギリスの東印度會社の設立。

日本にては秀吉の刀狩り、檢地等、内政整備の後をうけて、十四世紀以來、出沒自在の活躍をつゞけて來た倭寇の總決算とも見らるべき征韓、証明の役あり。西に歐人の東漸運動、東に日本人のこの壯舉、中亞に蒙古人の動き、世界は何を求めてゐたであらうか。

#### 一六〇〇—九

英・蘭の東洋における植民貿易競争益々進む。

日本にては、關ヶ原合戦後、徳川氏の制覇確立される。所謂、日本史に於ける近世期の始めである。家康は、活字印刷を始め、伏見に學校を建てる等、文化的建設をも急ぐ。

中江藤樹生る（一六〇八—一六四八）

#### 一六一〇—一九

ドイツ國內封建諸侯の覇權爭奪戦とも言ふべき三十年戦争始る。此の間彼等は内的革新に留意して自己の成長を望む。ワイマール教育令の如き。

日本にては益々封建的硬化の時代、切支丹は嚴禁。山崎闇齋生る（一六一八—一六八二）。

#### 一六二〇—二九

オランダ益々東洋に迫り遂に臺灣占領。フランスの宰相リシュリユ、ブルボン王朝を、隆盛に導く。

日本では、切支丹禁止益々嚴し。洋書輸入禁止、踏繪等の勵行。

#### 一六三〇—三九



碩學ガリレオ投獄。ジョンロック生る（一六三二—一七〇四）シュベネル生る（一六三五—一七〇五）

つひに島原の亂起る。参観交替制等整備。

### 一六四〇—四九

三十年戦争終結、ウエストファリア條約。イギリスでは、王と議會との衝突、クロムウエルの革命、つゞいて共和宣言。

ドイツのゴータ侯エルンストの新教育令、米國のマサチュウセツ州でも強制教育令等—  
—近世普通教育への歩みを見る。

ライブニッツ生る（一六四六—一七一六）

### 一六五〇—五九

イギリス、オランダの海上權をめぐる對立は益々激化、遂に航海條例發布となり、兩國開戦となる。

女子教育家フェネロン生る（一六五一—一七一五）キリスト教主義に基づく教育者ラ。

サル生る（一六五一—一七一九）。コメニウスの「世界圖解」出づ。

徳川三百年の太平の夢は鎖國と共に始つたかに見えたが、なほ浪人の謀叛等跡を斷たず。  
（別木庄左衛門、由井正雪）又一方徳川光圀の大日本史編纂に着手するあり。

### 一六六〇—六九

フランス亦後ればせ乍ら、植民競争の舞臺に上る、東印度會社設立。フランケ生る（一六六三—一七二七）。ニュートン引力の法則發見。

山鹿素行の「聖教要録」出づ。

### 一六七〇—七九

ペートル大帝即位、北歐の空に虎視眈々として、開明政策を展開する。  
リヨン師範學校創立。フェネロンの「女子教育論」出づ。

### 一六八〇—八九

ロマノフ王朝の極東政策も愈々油が來り出し、清國との國境線確定のためのネルチンスク條約締結。イギリスにては、名譽革命あり、妥協的政治形態を完成。ラ・サルのパリ



師範學校立つ。フランスの實學派モンテーニュ生る(一六八九—一七五五)

日本にては武士と町人の勢力均衡の上に醸成された元祿文化。石田梅巖生る(一六八五—一七四四)

### 一六九〇—一九九

此の時期におけるイギリスの經濟的進展の標識、イングランド銀行創立。

英國の生める經驗主義者ジョン・ロックの「教育思想」出づ。ヴォールテル生る(一六八九—一七七八)。彼は所謂革新文學者として、當時の名君達の渴仰を一身に集めるに至る。

日本では、國學の先達加茂真淵生る(一六九七—一七六九)。

革新文學は西歐の封建の基穴を掘り、國學は日本の封建に双向ふに至る。東と西の皮肉な一致。

### 一七〇〇—一〇九

イスパニアの王位繼承戦役が起り、東にはプロイセン王國の創設。

本朝は元祿十四年以降に當り、細井平州(一七〇八—一八〇二)生る。

### 一七二〇—一九

ルソー生る(一七二一—一七八) デイドロー生る(一七二三—一八四)

### 一七三〇—二九

バセドー生る(一七二〇—一九〇) カント生る(一七二四—一八〇四)

日本は享保時代。吉宗公洋書の禁を緩め實學は鬱然として起り、室鳩巢「六諭衍義」を著はす。

東西揆を一にして近世への準備に没頭したかの觀がある。

### 一七三〇—三九

プロシアのフレデリック一世の普通學校令は、教育史に一つのエポクを與ふ。

本居宣長(一七三〇—一八〇二) 松阪に誕生。

### 一七四〇—四九

ザルツマン(一七四四—一八一二) ペスタロッチイ(一七四六—一八二七) 生る。ヘッ



ケルはベルリンに實科學校を起す。又、モンテスキューの「法の精神」著はる。

### 一七五〇—五九

フランクリンは電光の研究に近代科學への光明を投げかけ、我が朝は寶曆二年、竹内式部の獄あり。

### 一七六〇—六九

七年戰役漸やくその和をフベルスベルクに媾じたことは、中歐の戰雲一時おさまるかに見えた、この年間ハーグリーヴスの紡績機の發明及びワットの蒸氣機關の發明あり。産業革命の前夜をなす。ロシア地方學事通則の發布を見るかたわら、ルソーは「人間不平等起源論」及び「民約論」を著はして世に問ふ。

シュライエルマツヘル生る。(一七六八—一八三四)

### 一七七〇—七九

アメリカの「獨立宣言」は、歐洲近世の嵐と血の時代への先蹤をなし、オーストリアは小學校令を施く。

### 一七八〇—八九

フランス大革命起る。即ち、近世史の第一頁である。

ベスタロッチイは「隱者の夕暮」をカントは「純粹理性批判」を、著はす。愛と理性との二つが、ギロツチンの廣場に亂舞し、この動亂は次の

### 一七九〇—九九

に當然持ち起して、九十三年の恐怖時代に進轉する。餘波はスウイスに共和國を樹立し、プロシアは早くも教育の國家統制に着手。全歐は佛國の革命に障壁を廻らす。フレーベルはこの間に生れた(一七八二—一八五二)

我國は將軍家齊の時代で、所謂、寛政異學の禁を布いたが、その下から鈴屋大人の「古事記傳」が、皇道理論に一礎石を置いた。

### 一八〇〇—〇九

ナポレオン一世の即位。この中世的に假面の帝王と、若い英國宰相ピットとの爭覇。ベスタロッチイは「ゲルトルード」を著はし、シルレルは中世傳説の英雄「ウイールヘルム



テル」を上梓。ナポレオンはその「法典」を制し、パリに大學の創設する。この間、英國人フルトンはその蒸氣船をチームズの河上に泛べる。歐洲の、近世と中世とが、以上の如くに最後の團圓を急ぐ時、我が國はあたかも文化年間の泰平に夢をむさばる時代であるが、かゝる影響は大洋をへだて、登音を傳へるのでもあらうか、開成所（翻譯局）が設置され、洋學の隆盛を看つゝあつた。

#### 一八一〇—一九

ナポレオン、モスコウ・ウオタールーに敗れ、セントヘレナに配流。プロシア公立師範學校の創立を見る。ダーウインは一八〇九に生れ（至一八八二）、スペンサー（一八一五—一九〇三）又生る。

#### 一八二〇—二九

アメリカ・モンロー主義の宣言。フレibel「人の教育」著述。

#### 一八三〇—三九

フランスの七月革命・ベルギーの獨立はこの期の重大事件であり、イギリスは産業革命

を了えて既に次に來るべきもの爲め、工場法・救貧令の施行を見る。ガウスは電信機の發明に着手し、佛國文相ギゾーは小學校令を出す。

日本は天保時代に當り、大鹽平八郎の叛亂あり、華山、長英の蕃社の獄あり。民衆の苦と、攘夷開港の説紛々たる間に、烈士吉田松陰西國の一隅に呱呱の聲を擧ぐ（一八三〇—五九）

#### 一八四〇—四九

この年度は、西歐の東洋への侵略に最後の一點を晴したる阿片戦争が、同時に、我が國維新への大きな促進劑ともなつた時代である。佛國には二月革命が起つてナポレオン三世に登場の機を與へ、北米ではカリフォルニアは金礦が発見されてゴールドラッシュ。全世界が野心の魔藥に酔ひしれてゐた時、遠くペテルスブルクの陋屋の屋根部屋で、貧縷の一青年がせつせと羊を走らしてゐた。文豪ドストエフスキーがその「貧しき人々」を見出された時、ゴーゴリの喜劇「外套」が、彼にあつては悲劇として、眞正面にロシアの民衆に叩きつけたのである。

我が國にあつては天保から嘉永にかけて、尊攘と佐幕開港兩論が、すでに政策として對



立を見た時代。

一八五〇—五九

しかもそれは具體的には嘉永六年（一八五三）のベルリの來航に始まる。これから、安政・萬延にかけての十年間は、我が國にあつては西歐の一世紀間の經驗を壓縮したものであつた。和親條約・開港假條約、さては安政の大獄に有爲の青年を失ふ。かゝる政治的・經濟的動亂の中にあつて、松陰は松下村塾を始め、福澤先生は「慶應義塾」の前身を創め、近藤眞琴は「攻玉社」を起す。

歐洲に於いては、ルイ・ナポレオンのクーデターあり、ロシアはクリミアに敗れ、英は労働者に對する政策に没頭する。（集團禁止法）その間、ダーウインは不朽の著「種の起源」を著し、次の時代の文化を起すべく、ナトルプ（一八五四—一九一四）ケルシエレシユタイナー（同）デウキ（一八五九—）生れ、北歐にはエレン・カイ女史（一八四九—一九二六）生る。

一八六〇—六九

明治維新を中心に、文久慶應の征長軍から長州の奇兵隊の活躍。西に薩長聯合の盟約あれば、中央に十津川郷士の活躍、東には筑波の擧破れて志士の悲憤を起すあり。南より大政奉還の献策出でて、世は一新、國是の要を五條につくして、堂々茲に東洋君子國の行進始まる。殘抗猶西より東し、東より北の方會律・函館に終るや、一國の文化蔚然と起り、先づ、京都には學習院の再興をみ、江戸には昌平黌の名大學と改まるあり。福澤氏「西洋事情」を廣く世に紹介し、ミル「自由の理」譯成りて紙價を高む。

この間、歐米は夫々特殊の様相を以て變革をとげてゐた。即ち、ロシアはその農奴を解放し、合衆國はリンカーンの血を以て奴隸の自由を購つた。中歐猶亂れて、プロシアは世紀の始めより養つた力を國內ドイツの統一にさしむけ、先づ、オーストリアを破つて中世的な神聖ローマの鎖をたち切る。この間、レセツプスの營々苦辛はスエズの地狹を切り開き、こゝに東西兩洋の道は地球上の距離を短縮した。米國はこの末年、南北戰爭後の國內統一の資として國立教育局をはじめ、スペンサーはその「教育論」を公にす。文藝界の高峯たる「戰爭と平和」は、トルストイ翁の手に發刊さる。



一八七〇—七九

普佛戦争と露土戦争は、統一と獨立との兩面を現はしたものととして、この期の歴史を讀む者に奇異を感じしめる。英國の小學校令成り、モンテツソリー女史生る。我が國のこの十年間は項目だけを擧げて目まぐるしい程であつて、學制の頒布・徵兵令・地租改正の三つの軸の下に、教育界では兵學寮・海軍機關學校の設置、教育令、同上改正令が行はれる。ベンザムの「民法論綱」ルーソーの「民約論」等翻譯思想は堤を切つて流入す。

一八八〇—八九

明治十三年より二十二年までの歴史は、前年西南の役をうけての不満が、國會開設運動の形をとつて、同開設の詔勅下さるゝや、たゞちに政黨の結集が問題となり、特にこの間、自由黨の運動が華々しかつた。併し、政府も之に對する準備を進めて、憲法の草案を作り、内閣官制をはじめ、地方自治制を固める等のことを爲す一方、日本銀行創立・兌換開始及び日本郵船會社創立から東海道鐵軌全通等金融・交通に先づ經濟的な軌道の

完成を急いだ。國內教育の機構に於いては、十九年森文相の學校令を中心に、その以前から師範教則大綱を定め、陸軍大學を開き、視學制度を確立し、かくて軍制の一應の完備をとげたるは明治十五年「軍人勅諭」の御下賜を以つてその期とすべく、學制の根本を定めたるは、越えて明治二十三年「教育ニ關スル勅語」の御下賜を以つてその期とすべきであらう。

この間、佛國は安南に經略の手を伸ばし、英國はエヂプトの王國を吞噬し、歐洲のこと植民地争奪の氣運は、既に世界戦争の風雲をはらんで、先づ獨逸伊三國同盟は、佛露の協調を促がしてゐた。教育界としてはフランスの義務教育制確立したが、これは勿論、普佛戦争の敗戦から、佛が反省をなした一つの結果ともみられる。

西にはこの頃、ゾラ派の自然主義者文學、イブセン流の社會批判的文藝が起ると共に、日本にては、中江兆民の「民譯譯解」や、馬場氏の「天賊人權論」等、急進的自由主義が行はれつゝあり、スミスの「富國論」ダーウインの「人類成來」亦翻譯紹介さる。

一八九〇—九九



帝國主義戰爭の前夜に當る。露國侵略着々東方に伸び、朝鮮は東洋のバルカン半島に似たり。西の方、背面の憂と、國內叛亂を恐れつゝも、手を東方に伸ばさんとする露帝の政策はハーグに萬國平和會議を召集したが、もとより之れ一片の外交的約束に過ぎず。この間、我が國は明治二十三年憲法發布國會開設に始まり、日清の役を過して、三十三年條約改正の實を得るに至る。教育上では改正小學校令が發せられ、實業教育の促進は、國內工業産業の發達に伴つて實施せられた。

#### 一九〇〇—一四

明治三十五年（一九〇三年）日英同盟の締結に依つて、國際的に一步を占めに日本は、越えて三十七年對露の宣戰を布告し、四三年（一九一〇年）日韓併合によつて、東洋は一先づ和平に歸す。然るに、この間歐洲はモロッコ問題。トルコ事件等が發生し、新興ドイツの東漸來策は、ロシアの南下政策と相容れず、こゝにバルカンの銃聲一發は、この世界の歴史に、荒廢と新生の一大轉換を來し、かくて一九一四年の世界大戰をまき起すに至つた。

我が國は日露戰役後、ひたすら國內の整備に之れ努めて學制に於いては、教科書を國定とし、専門學校令を施き、師範學校規定を定めて、義務教育の六年制を確立し、教員の待遇規定を設け、宗教局を設置、實業教育費の國庫補助法を制定した。

この記憶すべき十五年間以後、西歐は彈雨の中に血ぬられ、北歐は革命の巷と化し、更に南漸してドイツ國內にも革命の餘波が至るや、全歐は一世紀前フランス革命の經驗を思出して、たゞちに防壁の作業に着手した。

戰爭は熄んだ。しかし各國がこの闇の中から平和の廣場に顔を出した時、そのあまりの變貌に茫然たるものがあつたであらう。

年表は寧ろ、一九一四年六月二十八日、セルビアの一街區に起つた銃聲を以つて一先づ前史の區切りとすべきであらう。



三笠全書

昭和十三年三月三十一日印刷  
昭和十三年四月 日發行

預約頒價二册一圓六十錢

教育學概論

定價八十錢

外地定價八十八錢

著者 小野 久三

發行者 竹内 富子

東京市神田區西神田二ノ二

印刷者 堀内 文治郎

東京市神田區三崎町二ノ三

發行所 三笠書房

東京市神田區西神田二ノ二

電話九段四〇一三番

振替東京二二〇九六番



### 三笠全書刊行の辭

未曾有の躍進の時に當り、わが國の文運には寔に前途洋々たるものがあります。文化の進展亦この機を逸して他にあり得ず、學術ここに改めて興るの概があるのであります。

三笠書房が創業以來微力ながら、その熱と力により日本文化の向上に盡懃して今日に到りましたことは、今や漸く一般に認められたと云つても妄言ではないであります。併し小房は單に從來の業績を以て安んじることを欲しませぬ。更に遍く生新の學術普及に向つて斷乎その全精力を集中しようとするものであります。

創業茲に滿五週年、その躍進を記念して茲に現代學術の普及の爲め、「三笠全書」の刊行を企圖いたしました。惟ふに從來この種の圖書は稍もすれば西歐のその直譯に墮し、また知識の正確を缺くが如き憾み無しとしませんでした。「三笠全書」の重大なる特色とするところは、かかる弊に鑑み、執筆は飽迄も實質的權威者に懇請し、すべてその俊敏熾烈なる學的良心に委ね、その豊富なる知識を平易なる表現に壓縮し、且つ簡易なる形式に盛り、頌つに至廉なる價を以てしたことであります。

茲に發表するのは、その僅少部分に過ぎませぬが、既にこの中にも科學・哲學・經濟・産業・文學等の凡ゆる學術分野に於ける各々の中心的テーマを包含してゐることを確信いたします。而して今後これが益々充實改發を計り、以て現代學術の完璧を期し、一大百科全書としての最高機能を行せんとするものであります。何卒この企圖に對して御激勵御鞭撻を吝まれず、その目的の達成に協力御援助下されんことを大方に冀ふ次第であります。



三笠全書

第一期刊行總內容

新四六判各册  
二五〇頁平均  
定價一册八十錢

文化政策	三木清*	美術論	武田武志
世界文化史	加茂儀一	近代藝術	瀧口修造
日本上代文化史	早川二郎	日本工藝	滿岡忠成
東洋思想	秋澤修二	建築學	山口蚊象
批評論	本多彰顯	ルネッサンス	徳永郁介
萬葉精神	椎崎法藏	考古學	三澤章
古典作家研究	新島繁	原始社會	本田喜代治*
短歌論	渡邊順三	奴隸制度	辰巳經世
日本文藝學說史	本間唯一	經濟學說史	相澤秀一
一般藝術史	甘粕石介	日本社會史	伊豆公夫

社會國策

第二期刊行豫定種目

社會國策	相馬十吉	哲學概論	物質理論
政治思想史	今中次麿*	數理哲學	價值論
日本科學史	伊藤至郎	近世哲學史	地代論
近代兵器	本郷弘作	神話學	婦人問題
醫學思想史	巴陵宣祐	地理論	兒童問題
生物進化論	大行慶雄	日本文學史	法律論
技術史	榊本セツ	現代文學	交通論
統計數學	三野良信*	新聞理論	勞働科學
心理學	山田坂仁		
教育學概論	小野久三		
國語國字問題	高倉テル		
民俗學	赤松啓介		

\*印交渉中

以下續々刊行







253  
827

415



